

否定比較構文について

— 英語の no more ... than 構文を中心に —

武本 雅嗣

0. はじめに

インド・ヨーロッパ語族の比較構文の形式は実に多様で、形態論・統語論・意味論いずれにおいても非常に興味深い現象を呈している。言語間の形式と意味の対応関係の相違は、ゲルマン語・ロマンス語の中だけでもいろいろ見受けられる。なかでも、とくに我々の関心を引くのは、主節に否定的要素が含まれる場合である。まずは、次の *Harry Potter and the Goblet of Fire* の一文とそのフランス語訳ならびにドイツ語訳を比較されたい（太字強調は本稿筆者による）。

- (1) a. E : “I **no more** suspect Madame Maxime **than** Hagrid,” said Dumbledore, just as calmly.

(J. K. Rowling, *Harry Potter and the Goblet of Fire*.)

「わしはハグリッドと同じように、マダム・マクシームをも疑っておらんよ」
ダンブルドアは依然として平静だった。

(J. K. ローリング, 松岡佑子訳『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』)

- b. F : — Je **ne** soupçonne **pas plus** Madame Maxime **que** Hagrid, dit
I not suspect NEG more Madame Maxime than Hagrid said

Dumbledore du même ton paisible.

Dumbledore of-the same tone peaceful

(J. K. Rowling, Jean-François Menard (Translator). *Harry Potter et la Coupe de Feu*.)

- c. G : »Ich verdächtige Madame Maxime **genauso wenig wie** Hagrid«, sagte
I suspect Madame Maxime just-as little as Hagrid said

Dumbledore weiterhin gelassen.

Dumbledore still calm

(J.K. Rowling, Klaus Fritz (Translator). *Harry Potter und der Feuerkelch*.)

英語では否定限定詞 *no* を用いた *no more ... than* という否定優等比較構文が使われているが、フランス語では否定副詞を用いた *ne pas plus ... que* “not more ... than” という普通の否定優等比較構文で表され、ドイツ語では否定優等比較構文ではなく、強調的な否定同等比較構文 *genauso wenig ... wie* “just as little ... as” がとられている。翻訳の構文が原文の構文と違っているのは、翻訳者の好みによるのではなく、両比較対象が否定的に同等であることを表す否定比較構文が、フランス語もドイツ語も英語とは違っているからである。

英語の *no more ... than* をめぐっては、いわゆる「クジラ構文」を中心に、同

一形式が異なる意味（完全に否定的な同等つまり「同様に ... でない」と、完全には否定的でない同等つまり「同等に ... にすぎない」）を表す現象の統一的説明を目指して議論が続いている¹。他方、フランス語にはそもそも表層的には特別な構文は存在しないし、ドイツ語では程度比較と命題比較は異なる構文をとるので同じような議論は起こらない。また、比較表現に関しては、これらの言語の間には、統語的な相違だけでなく形態的な相違もある。比較級の形態は、総合的言語であるドイツ語では基本的に屈折形なのに対し、分析的言語であるフランス語では基本的に迂言形であるが、英語は分析的言語になっていながら屈折形と迂言形を併用している。英語と他の言語を比べてみると、否定比較構文に関して英語が特殊であることがわかるし、また、「クジラ構文」なるものの本質もみえてくる。

本小論の目的は二つある。一つは、英語の *no more ... than* 構文が複数の意味・解釈を生む仕組みについて、可能な限り簡潔に説明すること。もう一つは、英語とフランス語とドイツ語の三つの言語の形式と意味の対応関係について考察し、比較量子子の機能と構文交替の関連性に関する言語横断的研究の端緒を開くことである。本稿の構成は次のとおりである。第1章でまず、英語の「クジラ構文」のプロトタイプを再確認したうえで、第2章では、*no more ... than* 構文を程度比較用法と命題比較用法に分けて、意味構成と論理的意味と解釈の関係を整理して提示する。そして第3章では、否定比較構文の多様性は比較量子子の機能的相違に起因することを示唆し、この現象に関する本格的な研究への道筋を示す。

1. 英語の「クジラ構文」のプロトタイプ

その代表例にちなんで命名された英語の「クジラ構文」の基本的構造は *A is no more/less B than C is* (*B*) であるが、その典型例の述語 *B* は (2a) のとおり名詞である²。否定限定詞 *no* を用いる英語の「クジラ構文」〔鯨≠魚〕型と〔鯨=哺乳類〕型に相当する形式は言語によって様々で、冒頭で触れたように、フランス語（をはじめロマンス語）では論理否定を表す否定副詞を用いて否定不等比較構文で表され³、ドイツ語（やいくつかのゲルマン語）では否定不等比較構文ではなく、否定同等比較構文がとられる。

¹ そもそも「クジラ構文」という名称は言語学的に適切ではないが、説明の便宜上括弧付きで用いることとし、最後に、英語教育ではその俗称を使わずに「*no more ... than* 構文」について二用法を軸に説明すべきと提言する。

² 命題比較用法では比較節の述語が主節の述語と異なる場合もあるが、本稿では程度比較用法との相違に焦点を当てるので基本形のみを扱う。

³ ここでの問題と直接関係することではないが、フランス語では、比較節中で虚辞の *ne* “not” が、主節が肯定の場合には規則的に、主節が否定の場合には原則的に用いられる。

- (2) a. E : A whale is **no more** a fish **than** a horse is.
 「鯨が魚でないことは馬が魚でないことと同じだ。」
- b. F : La baleine **n'est pas plus** un poisson **que** ne l'est le cheval.
 the whale not-is NEG more a fish than not so-is the horse
- c. G : Ein Wal ist **genauso wenig** ein Fisch **wie** ein Pferd.
 a whale is just-as little a fish as a horse
- (3) a. E : A whale is **no less** a mammal **than** a horse is.
 「鯨が哺乳類であることは馬が哺乳類であることと同じだ。」
- b. F : La baleine **n'est pas moins** un mammifère **que** ne l'est le cheval.
 the whale not-is NEG less a mammal than not so-is the horse
- c. G : Ein Wal ist **genauso** ein Säugetier **wie** ein Pferd.
 a whale is just-as a mammal as a horse

何よりも留意しておくべきは、「クジラ構文」は程度比較ではなく命題比較であるという点である。述語が魚の例で言えば、比べているのは、鯨の魚の度合いと馬の魚の度合いなどではなく、鯨が魚のカテゴリーに属するかどうかと馬が魚のカテゴリーに属するかどうかである（魚の度合いの比較ならば形容詞の fish-like が用いられる）。命題比較のスケールは二値的な真値であり、真偽の二値差を否定しているので、結果として両者はともに真か、あるいはともに偽であることになる。それゆえ、命題比較の no more ... than は偽と同等であることを示し、「同様に ... でない」を表す。他方、no less ... than は真と同等であることを示し、「同様に ... である」を表すのである。

程度比較と命題比較の違いは、英語とフランス語では形としては見えないが、ドイツ語では構文が異なるのではっきりしている。否定不等比較構文に関して英語が特異な点は二つある。一つ目は、先ほど述べたように、本来数量否定を表す否定限定詞が程度比較でも命題比較でも用いられることであるが、二つ目は、比較級として屈折形と迂言形が併用されることである。英語の否定不等比較構文は、形式と意味がぴったり対応していないため、日本語母語話者にはその用法の理解が難しいわけであるが、その原因はやはりこれらの特殊性にある。

そういうわけで、混乱が生じないように、まず英語の「クジラ構文」の構造について再確認しておく必要がある。本稿ではとくに no more ... than を取り上げるが、そのプロトタイプの述語は名詞なので、[鯨≠魚] タイプの「クジラ構文」を最も厳密に定義づけると、「完全否定の同等性を表す no more NOUN than (以下、no more N than と記す)」ということになる。とりあえず仮にこう定義しておいて、形容詞の扱いをどうするかは、次章で検討することにする。

英語の no more ... than をめぐる先行研究で共通するのは、それが表す異なる意味を一つの枠組みで捉えて説明しようとしている点である。ごく簡単に

まとめると、とくに名詞に焦点を絞って、言語事実を最も重視してアプローチしているのは深谷 (2004)、名詞の属性読みについて最も的確に解説しているのは明日 (2014)、母語話者の直観に最も近い概念を提示して説明しているのは Sawada (2005)、意味・解釈に最も深く踏み込んでいるのは柏野 (2012) および本多 (2017)、構文の本質的な相違に基づいて「比較構文」と「同定イディオム」を最も適切に区別して論じているのは八木 (2015)、そして Hirota (2024) は先行研究を総括し、認知言語学的観点から包括的な説明を試み、かつコーパスを利用した調査・分析により構文の持つ意味の変遷を指摘している。英語の否定不等比較構文の形式と意味の関係は、程度比較と命題比較が異なる形式をとるドイツ語ほどではないが、それでも、まったく区別しないフランス語よりはわかりやすい。ところが、先行研究のいくつかは程度比較と命題比較を分けずに意味論を展開しているように見受けられる。この問題に対する我々の視点は、いろいろ相違はあるものの、基本的には八木 (2015) のそれに近い。ただ、no more ... than の意味について論じるには、柏野 (2012) に基づいて本多 (2017) が指摘している三通りの解釈をおさえておく必要がある。以下にそれらを示し、我々の観点から再検討することにする。

2. 英語の否定優等比較構文：程度比較と命題比較（〔鯨≠魚〕型）

本多 (2017) はクジラ構文の典型例 (4a) を示したうえで、「いわゆるクジラ (前件否定) の解釈」になる実例として、述語に形容詞が用いられた (5a) を挙げている。訳と注釈も含めて引用する。

- (4) a. A whale is no more a fish than a horse is.
b. クジラが魚でないのは馬が魚でないのと同じだ。
前件 A whale is a fish.
後件 A horse is a fish.
- (5) a. President Obama said Thursday that Syrian refugees are no more dangerous to the U.S. than tourists, ... (Web)
b. シリアからの難民は合衆国にとって危険な存在ではない。それは観光客が合衆国にとって危険な存在でないのと同じことだ。
シリアからの難民が合衆国にとって危険でないのは観光客が合衆国にとって危険でないのと同じだ。
前件 Syrian refugees are dangerous to the U.S.
後件 Tourists are dangerous to the U.S.

(以上、本多2017: 66)

確かに、述語が形容詞の (5a) は、それが名詞の (4a) と同様に、両者が完全に否定的に同等であることを表している。

そして、「クジラ構文」の典型例とは異なり、「『実はそれほどでもない』（前件抑制）の解釈」になる事例として(6)を、「『こっちだってそうだ』（後件指摘）の解釈」になる事例として(8)を示している。

- (6) President Obama says marijuana use is no more dangerous than alcohol, though he regards it as a bad habit he hopes his children will avoid. (Web)
前件 Marijuana use is dangerous.
後件 Alcohol is dangerous.
- (7) a. ×マリファナの使用が危険でないのはアルコールが危険でないのと同じだ。(前件否定)
b. ○マリファナの使用が危険だとはいってもそれはせいぜいアルコールが危険なのと同じ程度だ。(前件抑制)
- (8) 'Miranda, dear boy, is *beautiful*. Whether she can sing a note or nine don't matter three damns, she is *beautiful*.'
Teddy frowned. Now you're going too far, Dick. I know she's tall and all that, and her figure's quite good, but she's no more beautiful than you or I.' (Google Books; イタリックは原文、下線は本多。)
- (9) 「ミランダってかわいいよなあ。どのくらい歌が歌えるかなんでどうでもいい。とにかくあの子はかわいい」
テディーは眉をひそめて言った。「ちょっとそれは言い過ぎだろ。たしかにミランダは背は高いスタイルもまあいいしだけど、でも外見がいいって言ったってお前とか俺とかと変わらないレベルだよ」
(以上、本多2017: 67-68)

本多(2017)は、柏野(2012)が指摘したクジラ構文の語用論的な特性、つまり、いわゆるクジラの解釈(前件否定)と、反論提示的な「実はそれほどでもない」の解釈(前件抑制)と、同意表示的な「こっちだってそうだ」の解釈(後件指摘)がなぜ出のかを情報構造と関連づけて説明しており、解釈の説明に関しては妥当である。ただ、おそらく違いは承知の上で、no more N/ADJ than と no COMPARATIVE than (以下、no CMP than と記す)を同列に扱っているように見受けられる。それらを形態ではなく意味構成として峻別すべきだと思われるのは、次のような事例があるからである。(10)は(6)と同様に「前件抑制」の解釈、(11)は(8)と同様に「後件指摘」の解釈であり、それらの形容詞は、屈折型であれ迂言型であれ、いずれも比較級なので、意味構成的には no more ADJ than ではなく、no CMP than の事例とみなすべきである。

- (10) Dolphins are **no { more intelligent / smarter } than** other animals.
「イルカは他の動物より賢いなんてことはない。(両者に賢さの差はない) (前件抑制)

- (11) Be more confident! She is **no { more beautiful / prettier } than** you.
「もっと自信を持つのよ。あなただって劣らず美しいわよ。(両者に美しさの差はない)」(後件指摘)

形容詞の語彙特性にはあまり言及されないが、一部の形容詞の場合には、名詞の場合と同様に、完全否定同等(本多(2017)の「前件否定」)の読みしか出ないという点に着目する必要がある。その形容詞は、比較級がないか、あっても特殊な文脈でしか使われない非段階的形容詞である。

- (12) He is **no more { a liar / dead } than** you are.
「彼はあなたがそうでないのと同様に嘘つきではない/死んではいない。」(前件否定)
- (13) She is **no more { an actress / pregnant } than** you are.
「彼女はあなたがそうでないのと同様に女優ではない/妊娠してはいない。」(前件否定)

この種の形容詞としては、他に *alive, blind, Christian, illegal, scientific, objective, real* 等が挙げられる。このような非段階的形容詞の場合の構造は *no CMP than* ではなく *no more ADJ than* であるが、「完全否定の同等性を表す」という命題比較の「クジラ構文」の意味的条件を満たすので、非段階的形容詞が用いられた場合も「クジラ構文」に含めるべきであろう⁴。そうすると、前章で暫定的に定めた「クジラ構文」の構造 *no more N than* は、形容詞も含めて *no more NON-GRADABLE PREDICATE than* (以下 *no more NG Pr than* と記す) と改め、これを「クジラ構文」の本質的な意味構成として定義することができる。こう規定すれば、「前件否定」以外の読みとなる“no + 段階的述語の比較級(屈折形・迂言形) + than”は、「クジラ構文」ではないと言える。

さて、基本的に、完全否定同等の読みになるのは“no more + 非段階的述語 + than”であって、非完全否定同等の読みになるのは“no + 段階的述語の比較級(屈折形ないし迂言形) + than”だと捉えると、両義的な形容詞についても容易に説明がつく。*no more dangerous than* の場合、完全否定同等(本多(2017)の「前件否定」)と非完全否定同等(同「前件抑制」)の両方の読みがありうるのは、*dangerous* が非段階的述語としても段階的述語としても用いられるからである。わかりやすく言うと、前者の意味は「(絶対基準的に)危険な(存在)」、後者の意味は「(相対基準的に)危険度が高い」である。非段階的形容詞としては、例文(5)のように、主節主項は比較節主項と同じく「危険ではない」という完全否定の読みになり、段階的形容詞としては、(6)のように、主節主項は比較節主項と「危険度は同程度にすぎない」という非完全否定の読みになるということである。この種の両義的な形容詞としては、他に *effective, complicated, valid, harmful, successful* 等が挙げられ、どちらの読みになるかは、

⁴ 形容詞の分類に関しては、「相対的/絶対的 (*absolute / relative*)」とすることもできるが、ここでの問題は程度問題か否かなので、「段階的/非段階的 (*gradable / non-gradable*)」を採用する。

文脈と百科事典的知識による。

このような両義性は名詞でもありうる。名詞が用いられた場合でも、程度差打消しの非完全否定同等の読みが出る事例があるからである。たとえば、いずれも少々古い実例だがわかりやすいので挙げるが、(14)とは異なり(15)では、名詞句 *an ass* は段階的述語として振る舞っている。なお、(15)のほうは八木(2015)も取り上げている((14)(15)の太字強調は本稿筆者による)。

- (14) The British workman is **no more an ass than** the rest of his kind; and here is his chance of proving it.

(*The art journal London* (1887))

「英国の労働者は、他の同類と同様にばかではない。これはそれを証明する絶好の機会である。」

- (15) "Now, captain," said the squire, "you were right, and I was wrong. I own myself an ass, and I await your orders." "**No more an ass than I, sir,**" returned the captain. "I never heard of a crew that meant to mutiny but what showed signs before, for any man that had an eye in his head to see the mischief and take steps according. But this crew," he added, "beats me."

(Robert Louis Stevenson (1883). *Treasure Island*.)

「ところで、船長。」郷土さんはいった。「きみのいったことが正しくて、わたしがまちがっていた。わたしはじぶんをばかだとみとめて、きみの命令を待つばかりです。「わたしも同じほどばかでした。」船長はこたえた。「反乱をたくらむ乗組員が、そのまえになにかのしるしを見せなかったということは、ないわけです。だから、頭をはたらかす人間ならば、その悪だくみを見ぬいて、すばやく適当な手段をとったはずで。だが、この船のやつらは、と、かれはつけくわえた。「わたしより上手です。」

(スティーブンスン、阿部知二訳『宝島』(1975))

(14)の場合とは違って(15)が非完全否定同等の読みになるのは、*ass*の属性が顕在化して形容詞的に段階性を帯びているため、「ばかさ加減が同程度」と解釈されるからである。"**No more an ass than I, sir,**"は次のように *no CMP than* にパラフレイズできることがその証左である。

- (16) "No sillier than I, sir,"

このような一見反例的な事例も含めて矛盾なく説明するためには、*no CMP than* も「構文」ではなく「意味構成」とするしかないであろう。そうすると、述語が段階的な意味を持つ *no more (of) N than* も程度比較である *no CMP than* におさまることになり、命題比較である *no more NG Pr than* の意味構成の「クジラ構文」とはみなされなくなる⁵。なお、明示されていない主節主語よりも比較

⁵ 名詞に *of* が付いた場合も同じである。次のドイツ語の否定優等比較の文の英語訳には *of* 有り

節主語に焦点がある (15) (16) は、(8) の場合と同じく「後件指摘」とみなされる。その解釈が生じるのは、「図と地」の認知的反転（主節主項から比較節主項への際立ちの転換）が起こるからだと考えられる（「Cと同程度ならAがBである程度は高くない」（前件抑制）→「（高くないとはいえ）Aと同程度ならCもBである程度は低くない」（後件指摘））。

また、日本語訳の問題としては、「クジラ構文」の場合についても言及しておかなければならない。「クジラ構文」は、基本的に「CがBでないと同様に、AはBではない」と否定的に訳せばよいが、たとえば次のように、肯定的に訳したほうが適切な事例も少なくない。

(17) Angela: You're just a kid.

Jane: I'm no more a kid than you are! (*American Beauty* 映画シナリオ)

アンジェラ：あなたってまだ子どもね。

ジェイン：私が子どもって言うのなら、あなただってりっぱな子どもじゃないの。

(柏野2009: 22)

ただ、この日本語の表現は修辞学で言う「帰謬法」（「AがBならCもBだが、CはBではない。ゆえにAはBではない」）であり、明言していないものの、帰結の「ゆえに私は子どもではない」を強く含意しているので、解釈としてはやはり「前件否定」である。この読みが出ることについて柏野（2009）は「クジラ構文」と「背理法」の関連性を指摘しているが、実際「クジラ構文」は、本質的に、肯定から否定を導く背理法的推論を内在する命題比較構文である。背理法のうちとくに否定の導入の背理法は、形式意味論の式を使わずに平易に言うと、「命題Pを仮定すると矛盾が導けることにより、Pの否定 $\neg P$ (not P)を結論付ける」というものであるが、これは我々が日常的によく使っている推論である。とくに日本語で肯定的に訳されるような「クジラ構文」が日常会話で使われるのは、非段階的述語で構成される no more ... than が、矛盾を突くための推論プロセスを端的に相手にわからせることができるレトリカルな表現としてイディオム化しているからだと考えられる。

さて、以上の考察を整理して、no more ... than 構文の命題比較の場合と程度比較の場合の違いを示すと次のようになる。なお、同一構文の用法拡張は程度比較用法から命題比較用法へと進んだと考えるのが妥当なので、順番もそのとおりにする。

も of 無しもみられる（ドイツ語の無冠詞名詞 Sklave “slave” は属性形容詞的に機能している）。

(i) No one is **more (of) a slave than** he who thinks himself free without being so.

cf. Niemand ist **mehr Sklave, als** der sich für frei hält, ohne es zu sein. (Goethe, *Elective Affinities*)

「自由でないのに自由だと思っ込んでいる者ほど隷属的な者はいない」

用法	意味構成	否定差分	論理的意味	推論	解釈
程度比較	no CMP than	程度差 (段階差)	非完全否定同等	Cと同程度ならAがBである程度は 高くない	前件抑制
				(それでも) Aと同程度ならCもBで ある程度は低くない (図と地の反転)	後件指摘
命題比較	no more NG Pr than	二値差 (非段階差)	完全否定同等	絶対にBでないCと同等なら Aは絶対にBではない	前件否定
				AがBだとしたらCもBとなるから Aは絶対にBではない (背理法的)	前件否定 (帰謬法的)

本章の最後に、非文法的ではないものの、no more ... than 構文では tall, short, big, small などの屈折型形容詞は実際にはあまり用いられないことにも少し触れておかなければならない⁶。これは単なる形態論的阻止 (Morphological Blocking) の問題ではない。BNC と COCA を利用した詳細な調査・分析は稿を改めて行うので簡単に述べると、そのような高さや長さや大きさを表す典型的な数量形容詞の使用頻度が低いのは、それらが表す属性について二項対立的なカテゴリー解釈が生じにくいからであろう。young や rich もかなり有標 (BNC・COCA では皆無) ではあるが、tall や big よりはまだ使われやすいようである。それは、高低や大小よりも老若や貧富のほうが社会的階層としてカテゴリー解釈がなされやすいからだと考えられる。例文にはわかりやすく訳を付ける。

(18) You are no more young than I am.

「あなただって私同様若い部類ではないですよ。」

このような事例も我々の主張の反例とはならない。なぜなら、その意味構成が no more NG Pr than であることに変わりはないからである。

3. 否定比較構文の言語間の相違

さて、今度は少し視野を広げて、言語間の形式と意味の対応関係のずれの問題の考察に移ろう。本章では、英語・フランス語・ドイツ語の否定比較構文を対照し、否定不等比較構文の用法拡張の有無には、比較量化子の拡張的使用の可否が関係していることを示す。とくに着目すべきは、程度比較と命題比較の意味的・概念的な相違は、フランス語ではまったく顕在的ではないが、ドイツ語では構文の相違に反映しているという点である。では、三種の否定比較を三言語ではどのような構文が担うようになっているのかをみてみよう。

⁶ BNC には no more short than の使用例はある。ただし、その short の意味は「短い」ではなく「不足している」である。これは、段階性が語用論的に二値化された用法とみなせる。

① 優位性否定 [主節主項と比較節主項の関係: A ≤ C]

(19) a. E : No, Chicago is **not more dangerous than** Afghanistan.

(web 記事のタイトル)

「いや、シカゴの危険性はアフガニスタンより高いということはない。」

(危険の優位性を否定し、以下である(ここでは下である)という主張)

b. F : Non, Chicago **n'est pas plus dangereux que** l'Afghanistan.

no Chicago not-is NEG more dangerous than the-Afghanistan

c. G : Nein, Chicago ist **nicht gefährlicher als** Afghanistan.

no Chicago is not dangerous-er than Afghanistan

② 程度差否定(段階的優位差否定) [主節主項と比較節主項の関係: A = C] (前件抑制)

(20) a. E : Marijuana is **no more dangerous than** alcohol.

「マリファナの危険度はアルコールなみにすぎない。」

(危険度の優位差を否定し、同程度だという主張)

b. F : La marijuana **n'est pas plus dangereuse que** l'alcool.

the marijuana not-is NEG more dangerous than the-alcohol

c. G : Marihuana ist **nicht gefährlicher als** Alkohol.

marijuana is not dangerous-er than alcohol

③ 二値差否定(非段階的優位差否定) [主節主項と比較節主項の関係: A = C] (前件否定)

(21) a. E : Refugees are **no more dangerous than** tourists.

「難民の危険性は観光客と同様でない。」

(危険性の有無の差を否定し、同等に無だという主張)

b. F : Les réfugiés **ne sont pas plus dangereux que** les touristes.

the refugees not are NEG more dangerous than the tourists

c. G : Flüchtlinge sind **ebenso wenig gefährlich wie** Touristen.

refugees are even-so little dangerous as tourists

なお、柏野(2012)・本多(2017)が「後件指摘」とする特別な解釈の事例は、②程度差否定(段階的優位差否定: A = C)タイプの亜種とみなせるが、「後件指摘」の場合は、フランス語同様ドイツ語でも普通の否定優等比較構文が使用可能だが、同程度であることを強調するためには、同等比較構文のほうがむしろ選択される。

(22) a. E : Be more confident. She is **no more beautiful than** you. (後件指摘)

「もっと自信を持つのよ。あなただって劣らず美しいわよ。」

(美しさの優位差を否定し、同程度だという主張)

b. F : Aie plus confiance en toi. Elle **n'est pas plus belle que** toi.

have more confidence in you she not-is NEG more beautiful than you

c. G : Sei selbstbewusster. Sie ist **nicht schöner** als du. / Du bist **genauso**
 be confident-er she is not beautiful-er than you you are just-as
schön wie sie.
 beautiful as she

さて、ここで、冒頭で挙げた *Harry Potter and the Goblet of Fire* の実例とその翻訳に立ち返ろう。本稿では、主として be 動詞で構成される英語の no more ... than について考察を行ってきたが、no more ... than の読みは、主動詞が be 動詞でなくても、結局、程度比較か命題比較かで決まってくると言えよう。I no more suspect Madame Maxime than Hagrid という発話は、I no more suspect Madame Maxime than I suspect Hagrid の比較節の主語と動詞が省略されたものであり、程度比較（「同程度にしか疑っていない」）ではなく命題比較（「同様に疑っていない」）である。それゆえ、ドイツ語では、否定優等比較構文ではなく否定同等比較構文で表されるのである。

よく言われるように、英語の no more ... than は非常にレトリカルに使用され、イディオム化していることはたしかであるが、フランス語では ne pas plus が幅広く同様にイディオム的にも使われている。そこには、統語的制約の有無が関与していることは間違いない。比較量子子の命題比較での本来的でない使用については、英語は否定限定詞 no によってその制約を解消し、ドイツ語やオランダ語などは断念して否定的同等比較構文に任せているわけであるが⁷、フランス語をはじめロマンス語が何の手立てもとっていないことについては、比較量子子が程度比較だけでなく命題比較でも支障なく使えるからだということになる。なぜそれが可能なのかについては、言語横断的に検証する必要があるのでここでは示唆するだけにとどめるが、量子子が量子子でなくなっているわけだから、「脱量子化 (Dequantification)」と呼ぶべき現象なのではないかと考えられる。意味論の観点からは、優位性・劣位性の否定、程度の優位差・劣位差の否定、さらには命題の優劣、すなわち真偽といった二値差の否定までも同一形式で表す言語があることについては、統語的にそれらを区別する必要がないうえ、いずれも優劣差の否定という点で共通しているため、等価性を含意する基本形式によって一括して表現するようになっているということだと言えよう。このような現象は別段不思議なものではなく、否定不等比較構文の用法拡張の結果として理解することができる。

⁷ 英語と違って、ドイツ語では kein “no” は比較数量詞だけを限定することはできない。また、興味深いことに、アイスランド語では、命題比較の場合には比較演算子として meiri “more” ではなく frekar “rather” が用いられる。こういったことについては、準備中の別稿で取り上げて詳述する。

4. おわりに

否定不等比較構文の解釈には推論がかかわっていることは間違いない。ただ、三種の否定比較を一つの構文で表しているロマンス語母語話者にしても、それほど複雑な論理的思考を日常的に働かせているわけではなく、基本的にはスケールを取り替えて単純に優劣を測っているだけのように思われる。英語母語話者も同様だが、英語は、非完全否定同等を表す程度比較と完全否定同等を表す命題比較の区別を no ADJ-er と no more ADJ than の区別に反映させているようでいて実際にはずれているため、非英語母語話者には「クジラ構文」なるものが混沌としているように見えるわけである。本稿で取り上げたようなとくに be 動詞で構成される no more ... than については、表層的な構文ではなく意味構成により論理的意味は決まってくると捉えると、説明も簡潔にできるのでないだろうか。つまり、否定優等比較の no CMP than であれば、程度差を否定して劣位のほうと同等であることを表すので「同程度に ... にすぎない」という意味になり、no more NG Pr than であれば、命題の真偽といった二値差を否定して偽と同等であることを表すので「同様に ... でない」という意味になる、ということである。後者が〔鯨≠魚〕型である⁸。

最後に、英語教育における説明の仕方を提案して本稿を閉じることにする。まず、言語学的に正確性を欠き、学習者の混乱を招いている「クジラ構文」という俗称は、もはや用いないほうが望ましいであろう。改めて no more ... than 構文として扱い、それには程度比較と命題比較の二つの基本用法があるとし、その区別は述語の意味特性（段階的述語 / 非段階的述語）の違いにあるという点に重きを置いて、次のように説明するのがよいと思われる。

no more ... than 構文の二つの基本用法

① 程度比較用法（段階的述語）

基本的構造は A is no more B than C is (B) であり、比較節の述語は通常省略される。主節の述語 B には段階的な述語、すなわち比較級をもつ形容詞が主に用いられる。日本語では「A は C と同程度にしか B ではない」または「C も A に劣らず同程度に B である」である。いずれにせよ、非完全否定同等の読みになる。なお、屈折型形容詞専用の no ADJ-er than 構文には程度比較用法しかない。

② 命題比較用法（非段階的述語）

基本的構造は同様に A is no more B than C is (B) であり、比較節の述語は通

⁸ 否定劣等比較の no CMP than の場合は、程度差を否定して優位なほうと同等であることを表すので「劣らず同じほど ... である」という意味になり、no less NG Pr than の場合は、命題の真偽の二値差を否定して真と同等であることを表すので「同様に ... である」という意味になる。この後者は〔鯨=哺乳類〕型である。

常主節と同一であるため省略される。主節の述語 B には非段階的な述語、すなわち名詞や比較級をもたない形容詞が主に用いられる。基本的な意味は、「C が B でないのと同様に A は B ではない」または「A が B であるなら C も B であることになる（が、C は B ではないので A は B ではない）」である。いずれにせよ、完全否定同等の読みになる。[鯨 ≠ 魚] 型の no more ... than 構文はこの用法のものである。

《重要補足》用法が曖昧な場合（両義的な述語）

同構造で B に段階的意味と非段階的意味の両方が可能な語句（例：dangerous「危険度が高い / 危険な（存在）」、an ass「ばか [属性形容詞的] / ばか（者）」など）が用いられた場合、前者の意味なら①の程度比較用法として非完全否定同等の読みになり、後者の意味なら②の命題比較用法として完全否定同等の読みになる。どちらの読みが適切かは文脈と一般常識によって判断される。（なお、比較的稀ではあるが、この構造で young や rich といった屈折型形容詞が用いられた場合には、ほぼ必然的に、程度解釈ではなく分類的解釈すなわち非段階述語としての解釈がなされ、完全否定同等の読みになる。）

【参考文献】

- Alrenga, Peter, & Kennedy, Christopher (2014). No more shall we part: Quantifiers in English comparatives. *Natural language semantics*. 22. 1. 1-53.
- 明日誠一 (2014). 「クジラの公式」の修辭的解釈を導出するメカニズム：主節の命題否定と属性否定の2つの読みを巡って. 『英語語法文法研究』 21. 89-105.
- Gotzner, N., Solt, S., & Benz, A. (2018). Scalar diversity, negative strengthening, and adjectival semantics. *Frontiers in psychology* 9. 1659. 1-13.
- Hackl, Martin (2000). *Comparative quantifiers* (Doctoral dissertation. Massachusetts Institute of Technology).
- Hilpert, Martin (2014). *Construction Grammar and its Application to English*, Edinburgh University Press. Edinburgh.
- 平沢慎也 (2012). 「クジラ構文」の「構文」としての意味はどこにあるのか. 『英語語法文法研究』 19. 50-65.
- 平沢慎也 (2014). 「クジラ構文」はなぜ英語話者にとって自然に響くのか. 『れにくさ』 5. 199-216.
- 廣田篤 (2015). No more A than B 構文の認知言語学的・語用論的分析. 『人間社会環境研究』 30. 23-29.
- Hirota, Atsushi (2024). *The no more A than B construction : a cognitive and pragmatic approach*. Hituzi linguistics in English. 38. Hituzi Syobo.
- 本多啓 (2017). クジラの公式の謎を解く. 『神戸外大論叢』 67. 3. 59-88.
- 今井隆夫 (2012). No more than 類の意味を perspective の違いから考える. 『瀬木学園紀要』 6. 37-46.
- 柏野健次 (2009). 教えるための英文法：比較表現編. 『大阪樟蔭女子大学学芸学部論集』 46. 17-28.
- 柏野健次 (2012). 「クジラの公式」とは何だったのか. 『英語語法レファレンス』 228-239. 三省堂.
- Kennedy, Christopher, & Louise McNally (2005). Scale structure, degree modification, and the semantics of gradable predicates. *Language*. 81. 2. 345-381.
- Kennedy, Christopher. (2007). Vagueness and grammar: The semantics of relative and absolute gradable

- adjectives." *Linguistics and philosophy*. 30. 1. 1-45.
- Michaelis, Laura A. (2011). Stative by construction. *Linguistics* 49. 6. 1359-1399.
- Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech, & Jan Svartvik. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London & New York: Longman.
- Sawada, Osamu. (2005). The cognitive characteristics of the idiomatic comparative constructions: the case of the no more/less... than constructions. *Proceedings of the 9th Conference of the Pan-Pacific Association of Applied Linguistics*. 273-280.
- 八木克正 (2015). 比較構文と同定イディオム— no more ... than 構文の本質—. 『英語語法文法研究』 22. 英語語法文法学会. 167-182.
- Van Rooij, Robert. (2008). Comparatives and quantifiers. *Empirical issues in syntax and semantics* 7. 423-444.